

東京外国語大学大学院地域文化研究科
21世紀COEプログラム
「史資料ハブ地域文化研究拠点」

<オーラル・アーカイヴ班>
聞き取り調査資料集

タイ編

目録

2007年3月

東京外国語大学大学院地域文化研究科
21世紀COEプログラム
「史資料ハブ地域文化研究拠点」

<オーラル・アーカイヴ班>
聞き取り調査資料集

タイ編

(04-Ka-1)・(05-Ka-1・2・3)

2004年・2005年（採録）

まえがき

本資料は、2002年度から2006年度にかけて実施された東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム「史資料ハブ地域文化研究拠点」に属す5つの研究班のひとつである〈オーラル・アーカイヴ班〉による聞き取り調査資料集『タイ編 (04-K a-1) (05-Ka-1・2・3)』である。

オーラル・アーカイヴ班による聞き取り調査は、本21世紀COEプログラム実施年度期間に、当班の班員、PD 研究員、大学院生および研究協力者によって実施された。調査実施地域は、タイ、カンボジア、ベトナム、ネパール、中国、日本である。

聞き取り調査は、テープレコーダー、ビデオ、MDレコーダー等の機器を用いて行われ、その録音テープ、ビデオテープ、MD等はこの資料集とともに東京外国語大学・仮オーラル・アーカイヴに保管されている。

タイでの聞き取り調査は、河路由佳によって2004年9月、2005年10月に行われた。テーマは「戦時下の元タイ人留学生への聴き取り調査」である。調査の実施にはタイ・チュラロンコン大学のウォラウト・チラソンバット氏の協力を得た。

戦前・戦中の来日留学生のうち、いわゆる「満蒙」を含む中国からの留学生を除けば、最も多い人数を占めていたのがタイ人留学生であった。特に、留学生を対象とした日本語予備教育史の上では、彼らの増加によって、非漢字文化圏出身の留学生に対する組織的な日本語予備教育が整備された点で重要な意義をもっている。この前後の事情や留学生の生活について、留学生であった当事者から話を聞くことが、今回の調査の主目的である。

2004年9月の調査では、私費留学生であったサワン・チャレンポン氏に、2005年10月の調査では、1943年度、1944年度のタイ国招致学生、チュムシン・ナ・ナコーン氏、スダー・ミンプラディット氏、プラシット・チャイチップ氏にお話をうかがった。

サワン・チャレンポン氏は1941年の秋に国際学友会に入って新たに完成されたばかりの日本語予備教育課程で学び、1943年の4月に希望どおり函館高等水産学校に進学、1945年9月に卒業した。

タイ国招致学学生事業は、大戦中の1942年2月、国際学友会とタイ文部省の間に結ばれた日泰学生交換協定に基づいて実施されたもので、第1回招致学生6人（男子4人、女子2人）が1942年9月27日、第2回の6名（男子4人、女子2人）が1943年8月28日に来日し、国際学友会日本語学校で日本語を学び、高等教育機関への進学に備えた。

チュムシン・ナ・ナコーン氏とスダー・ミンプラディット氏は第1回招致学生の女子学生、プラシット・チャイチップ氏は第2回招致学生である。高等教育機関に進学した第1回学生もそれがならなかった第2回学生も、時局が逼迫したため1945年2月に勉学半ばで帰国した。

本資料『タイ編 (04-K a-1) (05-Ka-1・2・3)』は、以上4名に対する聞き取り調査の内容を、河路が書き起こし、タイ語の部分、通訳の部分について本学研究生モンコンチャイ・アッカラチャイ氏の協力を得て、原稿に整理したものである。

聞き取り調査概要

(04-Ka-1)

1. 話者：サワン・チャレンポン（1922年11月8日生まれ。1941年7月来日。9月、国際学友会に入り、1943年3月修了まで、日本語を学ぶ。その間、1942年7月22-28、日本タイ協会主催、日タイ夏季林間学校に参加。（タイ人留学生11名、日本人参加者は、東京外国語学校タイ語部13名。山口武、外語講師も往路同行）
1943年4月、函館高等水産学校入学。1945年9月卒業。帰国後、タイ国水産局長）
2. 聞き手：河路 由佳、ウォラウト・チラソンバット
3. 年月日：2004年9月7日
4. 場所：タイ国、バンコク市
5. 使用言語：日本語（通訳：不使用）
6. 録音媒体：カセットテープ

(05-Ka-1・2・3)

1. 話者1：チュムシン・ナ・ナコーン（1926年1月25日生まれ。1942年1月15日 ラーチニ女学校中等科第六学年卒業後、第1回タイ国招致学生の6名に含まれていた女子学生2名のうちの1人として、1942年9月27日来日。10月1日、国際学友会に入り、1944年3月28日修了まで日本語を学ぶ。1944年4月に日本女子大学理科第一部一学年に入学。1945年2月14日、東京発帰国。その後、終戦までバンコク第二日本語学校で日本語を教える。1952-1957年、日本大使館の二等秘書官を務めたご主人に伴い日本で暮らす。その間、杉野ドレスメーカー学院に入って勉強した。1976-1989年、タイ・バンコクの西松建設に勤務。）

話者2：スダー・ミンプラディット（1926年8月5日生まれ。1942年1月15日 バンコク、サットリシー スリヨータイ女学校中等科第六学年卒業後、第1回タイ国招致学生の6名に含まれていた女子学生2名のうちの1人として、1942年9月27日来日。10月1日、国際学友会に入り、1944年3月28日修了まで日本語を学ぶ。1944年4月東京女子高等師範保育科に入学。1945年2月14日、東京発帰国。その後、タイ・バンコクで看護婦の勉強をし、WHOの奨学金を得て2年半英国に留学、主として産婦人科の看護学を修める。帰国後、長く看護婦として活躍。）

話者3：プラシット・チャイチップ（1928年10月29日生まれ。コンケン中学校6年修了ののち、第2回タイ国招致学生の6名の1人として、1943年8月28日来日。8月31日、国際学友会に入り、日本語を学ぶ。戦況の悪化により、1945年2月14日東京発帰国。帰国後は、日本語の通訳としてタイ政府に雇われ、のち新聞の編集者など。『タイ国元日本留学生会会誌』に4回に分けて「東京発の最後の船」と題したエッセイを発表している。

2. 聞き手：河路 由佳、（通訳：パウイトラー・マトカム）
3. 年月日：2005年10月3日・4日
4. 場所：タイ国、バンコク市
5. 使用言語：日本語（通訳：タイ語）
6. 録音媒体：カセットテープ